

被災地交流で学んだこと

村上市立村上第一中学校 3年 小林夏音

私は今、何を見ているのだろうか。当時小学四年生だった私は、テレビの画面を見て、そう思いました。地面がこんなに激しく揺れるはずがないし、波がものすごいスピードで町を飲み込んでいく映像を、受け入れることはできませんでした。2011年3月11日に発生した、東日本大震災です。この日は、日本中の人々にとって、忘れられない、忘れてはならない日となりました。

それから四年が経ち、私は以前と何ら変わりのない、平和な日々を過ごしています。とても幸せなことです。私が今置かれている状況、つまり、家族と一緒にご飯を食べ、学校に行けば私を認めてくれる友達がいる。そして家に帰って寝て起きればまたいつもの一日が始まる。こんな私にとってはあたりまえである生活がどれだけ幸せなことかを私は、ある経験を通して学び、感じました。

私が通う村上第一中学校では、震災直後から、福島県広野中学校などで被災地交流を続けています。チャリティイベントで集めた義援金を届けたり、現地の方のお話を聞いたりして、交流を深めています。私は昨年、初めて福島県を訪問しました。そこで私はたくさんの方の思いを聞きました。その中で私が一番心に残っている言葉は、西本さんという女性のお話です。西本さんは、当時のことを全て私たちに話してくださいました。絶望感や諦め、苦しい現実。その中でみた、人のつながりや本当の優しさ。そして、自分の手で少しずつ元の生活を取り戻そうという勇気ある決断。その話の全てに西本さんの「私たちはこれからも諦めないで進んでいく」という思いが込められていました。そして、西本さんは「伝えることを大切にね」「自分が何かしたい、始めてみたいと思ったら誰でもいいから、できるだけたくさんの人にその気持ちを伝えること。そうすれば必ず支えてくれる人がいるから。そして、応援してくれる人を大切にしてください。」とおっしゃっていました。

私は、自らの目で被災地の今の状況を知りたいと思い、福島へ行きました。そしてそこで、今の生活は幸せだと実感し、自分の意志や周りの人を大切にしていこうという決意をしました。これは、西本さんたちに会って、お話を聞いたからこそできたことです。私にとって、とてもかけがえのない、大切な経験となりました。

私たち中学生は、何かにつまずいたり、これからどうすればよいかわからなくなり、悩んでしまう時です。進路や人間関係でうまくいかないことが増えてきます。そんな時、私は、困難から立ち直ろうとしている方から実際に話を聞くことができました。そこで学んだことは、私の将来を決めるうえで大きなヒントになりました。友達や両親と進路について自分から積極的に話をし、自分の将来を具体的にイメージすることができました。私は世界のどこかで困っている人の助けになりたい、そのために世界のしくみを勉強したいという夢をもちました。そして、それに対し、友達や両親は応援するよと言ってくれました。これは、自分から話したことで得られたものです。自分の周りには、支えてくれる人がいるんだ、と気付くことができたのは、これから生きていくうえで大きな自信になると思います。

今回の広野中学校との被災地交流は、私に大きな影響を与えてくれました。自分には考えられない大きな経験をした人の話を聞くことで、私の中に新しい考えの種がまかれました。しかし、種をまいただけでは育ちません。大きく成長させるためには、話を聞いただけでは終わらず行動にうつしていかなくてはなりません。そして、その行動で自分に自信がついたとき、自分の中で新しい考えの花が咲いたといえるのです。みなさんも、まずは、新しい考えの種をまいてみませんか。